
sharp

綾師邦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sharp

【コード】

N9652M

【作者名】

綾師邦助

【あらすじ】

城北高校硬式野球部のエース、東海林晃佑の

甲子園での活躍を描く！

俺の名前は、ショウジコウスケ東海林晃佑

この、甲子園に、神奈川代表城北高校として、出ている。

実況「この好投手、東海林は、MAX154キロのストレートと、シャープな変化球が見せ味です。」

スパアアアツ！！

実況「ストライク！1回表、秋田代表秋田学園の攻撃は、三者凡退で終わりました。」

ここは、甲子園1回戦。たった、部員は12人、それで勝ち進んできた。

三浦「東海林！相手がビビッてる！今日も勝てるぞ！」

この人は、三浦監督、野球経験ゼロだが、監督になった。

三浦「落ち着いて投げていけよ！」

甲子園には、2度目の出場、50年前の事だ。

50年前は、おれのじいちゃんがエースでチームを準優勝へ導いた。

橘「東海林！！お前今日もいい球投げるな！！今日も勝つぞ！」

こいつは、キャッチャーの橘悠斗、タチバナユウト

俺の親友である。

1回裏。

1番上田竜太ウエタリュウタ

上田「さあ！こいや！」

竜太の気迫に、相手のピッチャーもおどけている。

しかし、竜太は1年生。小柄、ピッチャーは安心して、様子見のボールを投げた。

すると・・・

上田「ナメんじゃねーよっ！！！！オラアアアアッ！！！」

スパキイイイイイイイイイッ！！！！

超真芯でとらえた球はスタンドに消えていった。

上田「どうじゃあああああ！！！」

実況「驚くことにこの子は1年生です！！！」

1 - 0

東海林「さすがだ。竜太」

竜太「これが俺の実力っすよ。」

2番^{キムラコウイチ}木村光一

木村「……」

木村は、無口だが、ペースメーカー、こいつが調子いい日は調子がいい。

相手P「俺の球を打てるか!？」

スパン!!

早い、148キロ……

橘「おい?おい?東海林!お前より早いんじゃないの?」

東海林「俺より早かるうが、木村は打つ……ん!？」

コキッ……

シヨートに真正面に転がすシヨートゴロ

橘「おもしろい勝負になるかもよ。」

東海林「油断は駄目だぞー！橘」

3番 橘悠斗

相手P「こ……こいつは気迫が違う……」

シュッ！

橘「安全策の外角ですか……関係ねえんだよ……！」

カキイイイイツ！！

芯でとらえた球は、左へそれて行き、ファール

橘「うーん……惜しいな……」

相手P「あんなのに……当たっちゃまった……」

シュッ

橘「あーらよつと……！」

カキイイイイイツ

……

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

試合終了のサイレンが鳴る。

これで、城北高校と秋田学園の1回戦を終わります。

東海林「あざーしった」

18-0の圧倒的なスコアで勝利した。

橘「完封とは・・・甲子園でも強いな。お前は。」

東海林「お前こそ、何だよ、9打点って！」

橘「相手が弱いんだもん、148とか騒いでるけど、威力がない、しよっペー球だ」

上田「確かに、大したことなかったすね・・・」

藍川「残念ながら、次は、圧勝という事はなくなるね、」

こいつは、アイカワカズキ藍川和輝、データ野球の控えピッチャー。

藍川「2回戦の相手は、センバツ優勝校、東東京代表、富王高校だ。」

東海林「ほー、やっぱり、強いね、富王、まあ、秋の関東大会で俺らに負けたから、」

大したことないんじゃない？」

実を言うと、城北は、センバツにも出場している、1回戦負けだが。

藍原「実を言うとね、関東大会までは、2軍メンバーで来てるんだつて。」

橘「じゃ、コールド勝ちしたのは2軍だからって事？」

藍原「そうだね。1軍は強すぎるよ。エース藤村駿フジムラシユンの剛球に加え、

4番谷村のホームラン、地区予選では、10本ホームラン打ってる。」

東海林「バケモンかよ！？なんて普通の人は言うんだろうけど、驚かないね。だって」

橘「俺、地区予選、12本打ってるし」

東海林「勝てるな。」

？「それはどーかなー？」

橘「誰だよ、お前は」

藤村「俺は、藤村、富王のエースだけど？」

東海林「なんでここにいるんだ、練習は？」

藤村「練習はつきり言ってだりーから、試合見にきた、次の俺らの餌食は誰かな？って」

藍原「餌食？」

橘「言ってる、だけど見てるよ、この試合後に土を持って帰ることになるのはお前らだからな。」

藤村「はいはい、じゃっ、俺は宿舎に帰って寝よっかな」

・・・

甲子園2回戦当日

ベンチ

東海林「ふーっ！スッキリ快調なり。」

橘「なんでいつも、お前は試合前にうんこするんだよ！」

東海林「まっ、要するに抑えればいいんだよ、」

？「城北高校のみなさん、こんにちは！富王高校の主将、タニカワユウサク谷川祐作
です！」

東海林「なんだなんだ？」

谷川「今日の試合は、共に悔いの残らない、いい試合にしていきま
しょう！」

橘「お前らにとっちや悔い残るかもしれないけどな……」

谷川「……え？……まっ、まっ、とりあえずお願いします！」

……

三浦「いい奴じゃないか、谷川君。」

橘「早めにつぶして置くぞ、東海林。」

東海林「ああ、無論。」

……

試合が始まった、俺らは表の攻撃だ

1番 上田

木村「しゃしゃしゃ……」

外角のギリギリボール球

藤村「よく手を出さなかったな。でも・・・？」

シュツ！！

カYYYYYYYYYYYY

藤村「何いつ？」

地響きするような声援のスタンド。

しかし、風の影響で思ったより伸びず、センターフライ。

スリーアウト

橘「チツ」

藤村「うおおおおおおお！打たれた！！！！おもしろい試合になりそうだああああ！」

東海林「あいつはDMだな。」

1回裏、おれはマウンドに着く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9652m/>

sharp

2010年10月28日05時20分発行